

いつでも、
どこでも、
ずっとサポート

CO・OP
共済

みやぎ生協

「全国から届いた折り鶴とメッセージをお渡ししたら泣かれてしまい、もらい泣きした」——被災地に住む組合員を訪問した職員の、ある日の活動報告だ。共済の訪問活動は、共済金・お見舞金の請求手続きを支援すると同時に、被災者の心に寄り添う仕事でもあった。宮城・岩手・福島各県に全国から駆け付けた応援部隊は、61生協、計224人。コープ共済連からの人員も加えれば381人の職員が、地域や職域を超えて気持ちを一つにし、「助け合い」の気持ちを被災者に届けた。

助け合う気持ちを、届ける。 東日本大震災の被災地に 全国から支援が集結！

被災者の話をじっくりと聞き、
お見舞金をきちんと渡す

東日本大震災発生から約1カ月半たった4月28日、みやぎ生協の現地対策本部から被災地訪問活動に向かうチームに同行した。メンバーは、みやぎ生協の佐々木竹子さんとエフコープから応援に駆け付けた西田浩基さん。訪問活動も、宮城県にきたのも初めての西田さんがハンドルを握る。

訪問目標30軒のこの日は、多賀城市を訪れた。塩釜港と仙台港をつなぐ貞山運河には、壊れた船がまた横たわる。津波は運河と近くの砂押川を逆流し、多くの命と家財を奪っていった。徐々に片付けは進むが、どの家の壁や塀にも浸水した高さで泥の跡が残る。「1m 60cmぐらいまで水に漬かった」「1階が泥だらけになり、スコップでかき出した」「夫が橋の上に取り残されて鼻まで水に漬かり、命からがら逃



「お見舞金少しですが」と説明する佐々木さんに「金額じゃない。お見舞いをしてくれること自体がうれしいです」と話す手島裕子さん(写真左)。

偶然お会いできた加入者のご家族。「CO・OP共済は安いのに保障が良いので加入しましたが、まさか見舞金もらえるとは思ってなかったのうれしいです」



※ CO・OP共済では、地震や噴火・津波などで被災したかたがたに「異常災害見舞金制度」を設けている。CO・OP共済〈たすけあい〉には「住宅災害共済金」が支払われるコースがあるが、通常のCO・OP共済では、地震による住宅被害は免責事項に当たるため保障の対象にならない。見舞金制度はそうした保障の隙間を埋め、CO・OP共済加入者の「助け合う気持ち」を被災者支援に役立てるために設けられた。

げた」。お会いできた組合員がそれぞれに被災体験を語る。

佐々木さんも西田さんも「ご無事でよかったですねえ」と親身に話を聞きながら、「CO・OP共済に加入している」と見舞金が出るんです。今日はそのご請求手続きのおすすめに来ました」と伝える。手早く終わらせるなら簡単に状況確認だけすればいい。しかし最初は大きな被害がないと言っていた人も、話を聞いていくと、瓦が落ちた、給湯器が壊れたなどと少しずつ思いつき出し、被害がはつきりするのだという。「きちんとお見舞金をお渡しするために、被害状況をしっかり確認する必要があります」（佐々木さん）

厳しい現実が 訪問活動の原動力に

「息子が入っているので、手続きしようと思っていたところでした」「知人に見舞金が出るという話を聞いて、問い合わせしようと思っていた」などと、見舞金制度を知っている組合員もいた。

わざわざ書類を取り寄せなくても今の場で請求手続きができることを伝え、玄関で早速請求書を書いてもらう。さらに西田さんが、九州から応援に来たことを伝え、「福岡の生協組合員か

らのお見舞品です」とタオルやウエットティッシュを渡すと、驚きとともに感謝の言葉が返ってくる。「うれしいですね、遠いところからこうやって助けに来てくれる。被災して初めて、人の助けのありがたさを実感しました」。組合員の笑顔に、みんなの心が温まる。CO・OP共済アドバイザーとして、多くの組合員に加入を勧めてきた佐々木さん。「こうして一軒一軒回って、加入者に恩返しできるのはいいですね。自分が加入手続きをした方にお会いできた時は本当にうれしかった」



エフコープからのお見舞品セット。「共同購入チラシで呼び掛けたら、何十万人という組合員が協力してくれました」と西田さん。

という話を聞けば、眠れなくなることもある。「でも、その厳しい現実が訪問活動の原動力になりました。そして、皆さんが必ずありがたうと言ってくたさる。それが何よりうれしい」と話す。

「あなたの家は大丈夫？」と 心配してくれる人たちのため

訪問活動では、組合員の家族の安全も確認する。西田さんが「皆さんご無事でしたか？」と尋ねると、「あなたの家はどうでしたか？」と聞いてくる人たちもいた。「私を宮城の人間だと思ってしまうね。震災で大変な思いをしているのに、相手を気遣う気持ちを持っていて。すごいです——メン



写真左から、佐々木さん、家族がCO-OP共済に加入している松井良二さん、西田さん。「見舞金が出るんですか。思いがけないことでびっくりです。ありがたいねー」

バーの日報には、「『私は家の壁が落ちたくらいだから大丈夫。見舞金はほかの被害のひどい方に払ってください』と言われた」という報告もあった。

西田さんは、「今回の震災で人のあり方や組織のあり方が大きくクローズアップされた」と語る。

「被災地で盗みを働く者がいる一方で、自分の物を他人に分け与えようとする人もいる。利益優先に走った企業があれば、生協をはじめ被災地支援を優先した企業もある。生協は、今は当たり前に行なわれている食の安全に真っ先に取り組み、社会を変えてきました。今回生協が被災地のために取り組んだことも、社会を変えるきっかけになるのでは」

訪問活動を通じて、佐々木さんは「全国の職員が泊まり込みで駆け付けしてくれた。生協の助け合いの精神を感じた」と言い、西田さんは「人はもともと協同するようにできていると実感した」と振り返る。

「今回の震災で、生協がどう動き、いかに社会的使命を果たしたか——人事担当として若い世代とも話す機会が多い西田さんは、今後そのことも広く伝えていきたいと話してくれた。

（文・写真 早坂恵美）